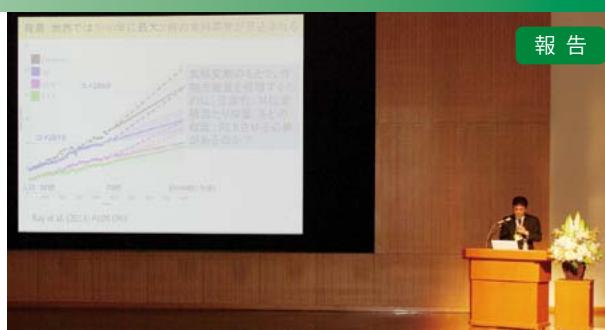


## NIAES トピックス

### 第13回環境研究シンポジウム 2050年の地球と暮らし －環境技術と地球規模課題－

環境研究シンポジウムは環境研究機関連絡会が毎年開催しているもので、13回目となる今年度は、11月10日(火曜日)に一橋大学(東京都千代田区)で、11の講演と100題に及ぶポスター展示をおこないました。今回は、2050年に地球と私たちの暮らしはどうなっているかについて、各研究機関の第一線の研究者が研究成果を発表しました。農業環境技術研究所は、連絡会の参加団体として、西森基貴上席研究員が「2050年の食料生産変動予測に向けて」を講演するとともに、最近の研究成果8題をポスターで紹介しました。



環境研究機関連絡会は、環境研究に携わる国立、国立研究開発法人及び国立大学法人の研究機関が情報交換し、環境研究の連携を緊密にするため、平成13年に設置され、現在、13研究機関が参加しています。

(連携推進室長 中野 正久)

## NIAES トピックス

### 農業環境技術公開セミナー in 秋田 環境と食の安全を守る農業環境研究

農業環境技術研究所では、研究成果を社会に発信し、その普及にかかわる地方自治体との連携を深めるため、公開セミナーを毎年開催しています。今年度は、秋田県農業試験場の共催、農研機構東北農業研究センターの後援により、秋田県農業試験場講堂で開催し、70名余りの方に参加いただきました。セミナーでは、環境保全型農法の評価手法や農産物に対するカドミウムのリスク低減技術などについて、5名の研究者が紹介しました。会場からは、放射性セシウムやヒ素など、カドミウム以外の有害化学物質のリスク低減に関する研究開発状況など多くの質問が出されるとともに、開発

した技術を広く普及するための課題や方策などが議論されました。

(連携推進室長 中野 正久)



## NIAES トピックス

### 生分解性プラスチックと分解酵素の活用シンポジウム 酵素処理ですぐに分解 畑で分解する農業用マルチフィルム

畑作に欠かせないマルチフィルムの多くはポリエチレン製で、使用後の回収に手間と処理費用がかかります。けれど

も、生分解性プラスチック製のマルチフィルムを使えば、回収と処理の必要がありません。作物を収穫した後に畑にすき込むと、土の中の微生物によって分解されるためです。

農業環境技術研究所では、11月13日(金曜日)に表記のシンポジウムを開催し、日本の野菜作りの状況や生分解性マルチの利点を学ぶとともに、マルチ使用後に分解が遅い場合に、酵素処理で生分解性マルチの分解を促進する技術の開発をめざして、研究の進ちょく状況を報告しました。会場からは、酵素を安価で大量生産できて、容易に使えるように早くなってほしいといった要望がありました。



酵素散布1日後の  
生分解性マルチ

(生物生態機能研究領域 北本 宏子)